冒険の文学

――西洋世界における冒険の変遷――

ポール・ツヴァイク／中村保男訳

文化放送

訳者紹介　中村保男　1931年東京に生まれる．1955年東京大学文学部英文科，1958年同大学院卒業．現在，早稲田大学講師．専攻　英文学．現住所 〒338 与野市大戸114．主な著訳書「翻訳の技術」（中公新書）C．ウィルソン『アウトサイダー』『暗黒のまつり』『オカルト』『新時代の文学』，S．マーロウ『コロッサス（ゴヤ評伝）』上下巻，チェスタトン『ブラウン神父』シリーズ他多数．

検印廃止　　THE ADVENTURER by Paul Zweig

冒険の文学　西洋世界における冒険の変遷

昭和五十一年七月二十日第一版第一刷

著者　ポール・ツヴァイク
訳者　中村保男
発行者　斎内祥三
印刷者　堀内俊宏
製本者　藤澤好子
発行所　株式会社文化放送開発センター出版部
郵便番号一六〇
東京都新宿区若葉一ノ五
電話東京(03)三五九局五〇七二
振替東京七一一三七九二八番

印刷所　株式会社堀内印刷所
製本所　藤澤製本株式会社

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。　Printed in Japan 1976 ©
0098—101801—7369

ポール・ツヴァイク
中村保男訳

冒険の文学

西洋世界における冒険の変遷

フランシーヌに捧ぐ

THE ADVENTURER
The Fate of Adventure in The Western World
by
Paul Zweig

Copyright © 1974 in U. S. A.
by Paul Zweig
This book is published in Japan
by BUNKA HOSO DEVELOPMENT CENTER Co., Ltd
by arrangement with Basic Books Inc., New York
through Charles E. Tuttle Co., Inc. Tokyo

日本語版翻訳権所有
文化放送開発センター出版部

まえがき

世界で最も古く、最も広範に流布している物語は冒険談であり、その主人公たる人物はおのが命を危険にさらして神話的な国々へ乗りこみ、人間界を超えた世界の話を土産としてもち帰る。その異界の話は、単なる人間が魔神(デモン)的な世界の風雪にも耐えて生き延びることができるのだという可能性を強く打ち出すことによって、人間の欲求・必要や人間関係という壊れやすい島をしっかりとひとつにまとめあげる。入神状態で霊界へと精神的に旅だつシャーマンですら一種の冒険者なのだ。

冒険というものを、心を娯しませてはくれるが些細な経験であるとして卻けてしまう現代社会の傾向は前代未聞のものであり、いかなる文化といえども、これほどまでに神々の意思を無視しようとしたものはない。この現状は、私たちの文化的価値がいかに慢慢不遜なものであるかを如実に物語っている。

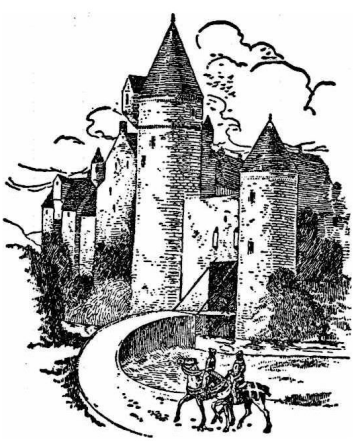
本書は、冒険というものの古代的・本来的な価値を探究し、ヨーロッパやギリシアや古代の中東の民話、叙事文学の中に住むあの魔神的、半人間的な存在である冒険者を検討することを目的としているが、〝家庭(ドメスティック)〟主義的傾向の強い現代文化の中で冒険者がいかにしてその立場を失い、失墜するに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

至ったかをも、少数の現代作家の作品に散発的に見られる新しい冒険神話の出現と共に、跡づけている。冒険の可能性は私たちの手中にある。なるほどその冒険は、もはや魔法の国でのオデュッセウスの武勲ではないかもしれぬが、私たちの人生の周辺をかすめ通る賭(リスク)と内面的な冒険のめくるめく強烈さの侵入なのだ。私たちとしては、そのさまざまな強烈さを尊重し、大いに真剣にそれを受けとめ、それをわがものとし、それに取り憑かれるだけでよい。

本書の一部はプリンストン大学のクリスチャン・ガウス・ゼミナーで講演されたものであり、その講演で語ったアイディアの幾つかを、注意深く鋭い読者を対象にして本書で験してみる機会を与えて下さったクリスチャン・ガウス委員会に謝意を表する。

冒険の文学　目次



まえがき

第一部

第一章　序　論……13
第二章　オデュッセウスの神話……33
第三章　英雄と冒険者たち……53
第四章　悲劇的な客人（ゲスト）……71
第五章　女性からの逃走……89
第六章　物語り（ストーリーティング）の冒険……113

第二部

第七章　内面的な僧……135
第八章　ロビンソン・クルーソー――非冒険的なヒーロー……152
第九章　ジャコモ・カザノヴァ――軽佻浮薄な冒険者……178

第三部

第十章　大いなる脱出……221
第十一章　冒険の新しい神話——エドガー・アラン・ポー……244
第十二章　ニーチェ——冒険の哲学……266
第十三章　結　論……289
註……327
訳者あとがき……340

冒険の文学

——西洋世界における冒険の変遷——

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

第一部

第一章　序　論

セルジョ・レオーネの映画『ウェスタン』に尋常ならざる場面がある。それまでの話の筋によって仮借なくお互いに向って惹き寄せられるが如く接近しつつあった二人のガンマンが遂に出会って決闘をする場面だ。それは超現実主義的なスローモーションで撮影されており、決闘が行われているのは一軒の家の裏手の空き地ではなく、あたかも当の二人の男しか存在しない沈黙の空間であるかのようだ。金属を叩きつけるような音楽が一挙手一投足にアクセントをつけ、まるで、この音楽の力に影響されてガンマンたちは厳粛な儀式を演じているかに見える。遂に撃ち合いが始まり、夢のような動きが崩れ去る。ぎくりとするような唐突さで、息たえんとする男と勝者とがいつのまにか人間世界の只中に孤立していて、一瞬のあいだ、一人の男がそこで——夢の中で——起ったことゆえに死のうとしているのがいかにも奇妙に思える。

冒険的な出会いの例を私は小説から取ってもよかったし、テレヴィの連続ドラマや作品から取ることもできたろう。が、このような実例を私自身の実生活から取ることはずっと難しい。冒険とはまさしく、私たちのほとんどが経験上知っている事柄ではないものだからだ。私たちが冒険と馴染むのは、〝文学〟を通じてである場合が多い。冒険は、当の物語だけがそこに私たちを運んでくれる異様な遠隔の地へと読者をいざなうのだ。

だが、その地はまったく異様だというわけではない。私たちの誰もが、自分の人生が危険によって麻痺させられてしまったように思える唐突な強烈さの瞬間というものを時たま経験しているはずだ。その危険（リスク）は、ルーレット盤の上をころがっている球でもよいし、凍った路面をスリップしている自動車であるかもしれず、恋人の反応の仕方がひどく曖昧で気がもめるということであるかもしれず、ただ異国の街を散歩しているというだけのことでもよい。偶然という爪先がどっちつかずに中空に漂って人の心を苛々させ、だしぬけに、どんな単純な出来事の成行きも予測できぬものとなる。一瞬のあいだ、私たちは闘士と化し、延命・生存のためのエネルギーが全身にみなぎり、自分をとりまく情景の一部始終を、あたかもそれが次に来たるべきものは何であるかを啓示してくれるしるしであるかのように読みとる。平素、私たちはこういう興奮の瞬間、日常生活からの逸脱をあまり重要視しない。こういう瞬間は私たちの傍をすり抜け、私たちは中断された時間の鎖を再びつなぎ合わせる。こういう瞬間は現実の自己からの〝一時休暇〟であり、それなりに満足をもたらしてくれる、追求して然るべき〝横道〟ではあるが、あまり遠くまでそれを辿って行ってはいけないものなのだと人は思う。

だが、こういう瞬間についてもっと別の考えもできるのだ。こういう瞬間を包んでいる強烈さの輝きには、何かこの世ならぬ別世界的なところがあり、人間と危険（リスク）との格闘が〝一時休暇〟であるどころか、むしろ本質的な体験への突入であるようにさえ思える。これが冒険談あるいは冒険物語の中で展開されている見方である。冒険物語が私たちに提供してくれるヒーローは、危険と対決というものに取り憑かれていて、私たちが自分自身のうちにちらりとしか垣間見ることのない選択を強く明瞭に打ち出す。それは冒険をとことんまで追求し、人生そのものを、死を敵とする孤独な闘いの連続として解釈しようとする選択なのだ。

冒険物語は、危険との戯れを一つの持続するヴィジョンに変える。それだからこそ冒険物語はしばしば〝逃避主義的〟であると非難されるのだ。冒険物語は私たちを根本的に私たち自身から引き離す。

〝この世界の外〟でそれは起るからである。この場合、〝この世界〟というのは、私たちが馴染んでいる人間関係や責任の圏内という意味だ。こういうわけでエリック・アンブラーは国際的な諜報活動の隠密世界を描き、エドガー・ライス・バーロウズはアフリカの密林を、コンラッドやメルヴィルは遙けき海洋を、「アラビアのロレンス」T・E・ロレンスはアラビア砂漠を、そしてSF作家たちは想像裡にのみ存在する異界や、奇怪きわまる機械技術を、描くのである。

冒険物語のエキゾティシズムは、もう一つの重要な要素と密接につながっている。つまり、冒険物語は〝アクション〟を豊富に含んでいなければならぬのだ。旧式な西部劇映画の場合のように、物語の焦点となる華やかな危険（リスク）のエピソードがこのアクションを提供しており、西部劇では、話の筋（プロット）は多くの魅力的なクライマックス――銃撃戦、追跡、砂漠での苦難など――を見せるためのきっかけでしかない場合が多い。こういう種類の物語にたいする私たちの要求は、〝真剣な〟文学、〝純文学〟にたいする要求とは明らかに異なっている。だから私たちは、〝アクション〟が豊富で見事に処理されていさえすれば、ありふれた場面設定やステレオタイプ化した登場人物を大目に見てやる心がまえがすでに出来ているのであって、あたかもそれは、〝アクション〟こそが物語の真の主題であり、人間関係はほんのおつまみ程度の背景でしかない、というようなものなのである。映画『ウェスタン』の中で二人のガンマンが神話的な空間を隔てて対峙するとき、スケッチめいた道徳的態度を打ち出しているプロットそのものは消滅する。一瞬のあいだ、いずれの男もヒーローでも悪玉でもない。二人はリスクを共にする共犯者であり、アクションという夢の如き要素を分ち合っている仲間どうしなのだ。

一般に有力な文学的、道徳的価値によれば、冒険文学の副次的・傍流的な性格は以上の説明によって規定されることになり、グレアム・グリーンもスパイ小説『恐怖省』の中でそう説明している。この小説の主人公はいわば未熟なおふざけとして冒険を経験するのであり、その態度はすばらしく魅惑的だが無責任なものだ。主人公はイギリスの農村地帯を突っきりながら、こう考える。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c